

事業を営む中で、どうにもならない大窮地に陥ることがあります。資金繰り、取引先とのトラブル、社員の離職……。

その瞬間、私たちは何を拠り所にすべきでしようか。『万人幸福の栄』第十二条には次のように記されています。

こうした一生に二度と出あうことのない大窮地に陥った時こそ、度胸の見せどころである。一切をなげうつて、捨ててしまふ。地位も、名譽も、財産も、生命も、このときどういう結果が生れるであろうか。まことに思いもよらぬ好結果が、突如として現われる。いわゆる奇蹟というのは、こうした瞬間に起る、常識をはるかに超えた現象に名づけたものである。

この言葉を裏づけるような体験をしたのが、昭和四十年代に大手電機メーカーに勤めていたSさんです。

高校卒業後、Sさんは大手電機メーカーに就職しました。持ち前のバイタリティで頭角を現わし、アメリカの大手コンピューター会社から依頼されたプロジェクトのリーダーに抜擢されました。部下は百二十名、会社の期待を背負った大きなチームの誕生です。しかし、連日の徹夜と休日返上の業務にもかかわらず、完成には至りません。締め切り当日、ついにタイムアップし、ミッションは失敗しました。部下たちは肩を落とし、涙を流す人もいました。Sさんはリーダーの務めとして、一人ひとりに声をかけ、



## 捨我に生まれる奇蹟 窮地を突破する純粋倫理の学び

経営者もまた、窮地に立たされることがあります。その時こそ、地位や名譽、利益への執着を捨て、社員や社会のために尽くす心に立ち返るべきです。捨我の心が、思ひもよらぬ突破口を開くのです。Sさんの心の変化がそのことを物語つて

見送った後、深いため息をつきました。「この責任をどう取るべきか」と、その答えは「自ら命を絶つ」ことでした。倉庫からロープを探し、フロアを見渡していたその瞬間、ハッと我に返ります。「自分は何をしているんだ。部下を置いて逃げるのか?」と思つた、その時、頭の中に突然数式が浮かびました。設計上の課題を解く鍵だと直感し、試しに当てはめると、フロッピーディスクドライブの構造がついに完成したのです。

数十年後、Sさんは倫理法人会に入会し、『万人幸福の栄』と出合いました。栄の第十二条を読んだとき、当時の心境を思い出したといいます。

失敗直前まで、Sさんの心には「成功すれば出世できる、給料も上がる」という自己利益の思いがありました。しかし、命を絶とうとした瞬間、「部下を置いて逃げではない。部下のために何とかしたい」と心が変わったのです。

この「自分本位の心を捨て、他者への思いやりに転換する」ことこそ、捨我の実践だといえます。『栄』が説くように、一切をなげうつたとき、常識を超えた結果、奇蹟が生まれるのであります。

え・城谷俊也